

# 隨泉寺寺報

平成 23 年 (2011 年) 12 月号 第 496 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

報恩講法要

講師 西應寺住職 平 義晃師

講題 『如来様のお慈悲』

■報恩講法要 ～親鸞様のご恩を偲ぶ法要～

報恩講(ほうおんこう)とは、浄土真宗の宗祖(開祖)親鸞聖人(1173年-1262年)の祥月命日の前後に、報恩謝徳のために営まれる法要のことです。本願寺三世覚如上人が親鸞聖人の三十三回忌に『報恩講私記(式)』を撰述した事が起源であるとされています。浄土真宗の僧侶・門徒にとっては、年中行事の中でも最も重要な法要です。本山で営まれる法要は、「御正忌報恩講」と呼ばれ、院・各末寺・各一寺院においては、「お取越」もしくは「お引上」と呼ばれ、「御正忌報恩講」とは日付を前後にずらして執り行われます。ご門徒のお内仏(仏壇)の前においても、大切に勤められます。



## 12月の法座予定

- 12月 1日 …… 結婚式準備 本部役員会
- 12月 2日 …… 結婚式 リハーサル
- 12月 11日 …… 掃除 長者原東
- 12月 14日 昼席午後1時より …… 報恩講法要
- 12月 14日 夜席午後7時より …… 出張法座 長者原東集会所
- 12月 15日 朝席午前10時より …… 報恩講法要 おとき
- 12月 15日 昼席午後1時より …… 報恩講法要 引き続き修復委員会
- 12月 20日 午後1時より …… 披露宴打ち合わせ
- 12月 24日 午後7時より …… 披露宴準備
- 12月 25日 午前10時より …… 結婚披露宴
- 12月 31日 午後11時より …… 除夜会

## ☆ 12月3日(土) 仏前結婚式



12月3日(土) 午前11時より隨泉寺本堂で長女鎌田弥名と藤智也さんの仏前結婚式を執り行います。10時半からラムーの前から行列を組んで進みます。時間が取れる方はお集まりください。できれば人生の大きな節目を祝福してやってください。阿弥陀如来さまのご尊前で結婚式を挙げる「仏前結婚式」は、親鸞聖人のみ教えをくむ



私たちにとりまして大変に意義深いものです。新郎新婦が出遇った因縁の尊さを味わい、お互いの理解と尊敬と責任のもと

に生きることを仏祖に奉告し、慈悲の光に包まれて敬愛和合の新しい家庭生活を送ることを誓い合う大切な門出の儀式です。また、同時に仏前での誓いを親族や友人、知人がともにかみしめ、祝い、ふたりの門出を多くの人に認めてもらう大切なものでもあります。



「仏前結婚式」は、ご法義をひろめるうえからも、本願寺が大切に考えている行事(仏教行事)です。ぜひ、これから結婚される方々にお薦め願いたいと存じます。お寺で行う結婚式のことを「仏前結婚式」といいます。文字のり、仏さまの前で行う結婚式だからです。

それは、自分が生きていく上で、心の依り所(心の支え)となってくださるのが、仏さまの「おしえ」だからです。その「おしえ」と共に歩いていく人生だから、人生で大切な結婚式を仏さまの前で挙げるのではないのでしょうか。仏教における結婚式は、二人が夫婦となるにいたった「因縁」を仏さまに感謝します。

仏教では、結婚そのものよりも、人間と人間の出遇いを大事に考えているのです。

## ☆御礼

永代経懇志	金	拾萬円	佐々木正信殿	故	佐々木光子様	特	永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	住田茂殿	故	住田壽々子様	特	永代経志として

## ☆御礼

門信徒会へ	金	一封	佐々木正信殿	故	佐々木光子様	香典返しとして
門信徒会へ	金	一封	住田茂殿	故	住田壽々子様	香典返しとして

12月

「願い」の中に生かされている私に  
気付かせていただくしあわせ

毛虫と、少しも変わるところのない私、しかし、愚かであるとはいえ、人間に生まれさせていただいたお陰で、「願い」の中に生かされている私に気付かせてもらえるしあわせを考えたとき、お念仏がとび出してくださった。

おかげも「願い」も忘れて

自転車のペダルを踏み急いでいる私

毛虫とちっとも変わらない境界で

毛虫とちっとも変わらない生き方をしている私

そのくせ 毛虫の愚かさをあざ笑っている

思いあがったキョウ驕慢の私

その私を自転車ぐるみ

思いあがりぐるみ

ささえていてくれるもの

本願

南無阿弥陀仏



「ほうおんこう 金子みすず」

報恩講

「お番」の晩は雪のころ、

雪はなくても暗のころ。 くらい夜みちを お寺につけば、

とても大きな蠟燭と、とても大きな火鉢で、

明るい、明るい、あたたかい。

大人はしっとりお話を、

子供は騒いじゃ叱られる。

だけど、明るいにぎやかで

友だちやみんなよって

なにかしないじゃ、いられない。

更けてお家へかえっても、

なにかうれしい、

ねられない。

「お番」の晩は夜なかでも

からころ足 の音がする。

金子みすず



金子みすずさんの『報恩講 (ほうおんこう)』という詩です。

金子みすずさんの詩を生んだもの。それは間違いなく仏教的な土壌だと思います。あの有名な「大漁」だって「わたしと小鳥とすずと」だって、お念仏の教えによって開かれた世界の表現としか読めないし。

みすずさんがお生まれになったのは山口県長門市仙崎というところ。ここは浄土真宗の教え、お念仏の教えが生活に根付いたかたちで伝承されていた場所なんだそうです。仙崎は捕鯨の町。実際に鯨を殺すことを生業にされていた人びとは、「殺」の罪を身を持って知っておられたのでしょうか。また命懸けで鯨と戦う日常の中で、死すべき生を生きる身を体感されていたことででしょう。まさに自らの生活をしてお念仏をいただいておられた人びとの町で、みすずさんはお生まれになったのです。

「お番」というのは、その地方で「報恩講 (ほうおんこう)」のことをいうです。そういう町のこと、年に一回の「報恩講」は、おごそかに、ていねいに、そしてにぎやかに勤められていたことでしょう。

大人は朝から晩まで仏の教えを聴聞し、子どもはとりあえずお寺で座っている。前でしゃべっているお坊さんの言うことの意味は分からないけれども、いつもと違う大きいロウソクが何か心をワクワクさせる。みすずさんの『報恩講』という詩から、そういった風景そのもを感じることができますね。

『花のたましい』

散ったお花のたましいは、  
み仏さまの花ぞのに、  
ひとつ残らず生まれるの。

だって、お花はやさしくて、  
おてんとさまが呼ぶときに、  
ぱっとひらいて、  
ほほえんで、  
蝶々にあまい蜜をやり、  
人にや匂いをみなくれて、

風がおいでとよぶときに、  
やはりすなおについてゆき、  
なきがらさえも、  
ままごとの  
御飯になってくれるから。

